KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

第32回
春日井市交響楽団
定期演奏会

2024年
7月14日(日)

会場：春日井市民会館

主催：春日井市交響楽団
後援：春日井市、春日井市教育委員会、
(公財)かすがい市民文化財団、中日新聞社、中部大学

春日井市交響楽団HP
(https://kasugaiphil.org/)

アカウント
@kasugaiphil

ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
石　黒　直　樹

本日は、第32回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

1990年に誕生しました当交響楽団が、市民の皆様に親しまれ、本市の音楽文化の振興とともに長きにわたり続いてまいりましたことは、団員の皆様はじめ関係者のたゆまぬご努力と、市民の皆様からのあたたかいご支援の賜物であり、心から感謝を申し上げます。

今回も、指揮者に井村誠貴氏を、コンサートマスターに平光真弥氏をお迎えしました。交響楽団が奏でる重厚で深みのある音色が、市民会館のホールに響き渡り、会場の皆様に大きな感動を与えてくれるものと期待しております。

さて、人生100年時代に向け、誰もがいきがいを持ち自分らしく活躍できるまちづくりを進める中で、文化芸術は大きな役割を果たすものと考えております。本市では、「世代を越えて響き合う　文化創造のまち春日井」を目指し、様々な取り組みを展開してまいりますので、なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、素晴らしい音楽とともに、本日のこのひとときを心ゆくまでお楽しみください。

春日井市交響楽団
会長

学校法人中部大学
理事長･学長
竹　内　芳　美

第32回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として誕生した当楽団は、アマチュアオーケストラとして、そして、地域に貢献できる楽団として、皆さまからの温かいご支援、ご協力のもと、活動を続けております。32回目となる定期演奏会を開催できる喜びを深く噛み締めると共に心から感謝申し上げます。

指揮には井村誠貴氏、客演コンサートマスターとして平光真弥氏をお迎えいたしました。今回、皆さまにお届けするのは、ベートーヴェンがゲーテの戯曲に付けた劇音楽「エグモント」序曲を皮切りに、19世紀最高のピアニストとして名高いリスト作曲の交響詩「前奏曲」、そしてシベリウスが作曲した7つの交響曲のうち、最もポピュラーな作品である「交響曲第2番 ニ長調作品43」です。

楽団員一同、皆さまに極上の音楽をお届けするため、日夜努力を重ねて参りました。その成果を披露できることがこの上なく嬉しく、そして、我々自身も今日の演奏会を心待ちにしています。文月の午後のひとときを、感動の杜に出かけましょう。

ごあいさつ

団長 **後藤 哲也**

本日はお忙しい中、第32回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

今回の演奏会ではシベリウス作曲の交響曲第2番を取り上げました。シベリウスといえば「フィンランディア」という曲が有名で、それと比べるとシベリウスの交響曲はあまりなじみがないかもしれませんが、この第2番は親しみやすい旋律も多く、北欧の壮大さを味わっていただけるのではないかと思います。

そして、前半には「エグモント」序曲と交響詩「レ・プレリュード」をお聞きいただきます。「エグモント」はベートーベンの曲で、その音楽がCMにも使われていて耳にされたことのある方もいらっしゃると思います。また、「レ・プレリュード」はピアニストとしても有名だったリストの曲で、変化に富んだ聴きごたえのある曲で、きっとお楽しみいただけるものと思います。

今後とも、より幅広い音楽を良い演奏でお届けできるよう努めてまいりますので、引き続きのご支援をよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、当楽団の活動に当たり日頃からお力添えをいただいています春日井市・中部大学をはじめとした関係各位の皆様に感謝申し上げます。

プロフィール

指揮 井村 誠貴 Masaki Imura

指揮者。1994年大阪音楽大学コントラバス科卒業。在学中よりオペラ指揮者として各地で研鑽を積む。オペラレパートリーは50演目を超え、中でも喜歌劇楽友協会におけるJ.シュトラウスⅡ「ウィーン気質」の邦人初演は注目を集めた。2001年イタリアに留学。現地ではAs.Li.Coの北イタリア・オペラ公演ツアーに同行し、副指揮者として高い評価を得た。2013年には年間オペラ公演回数が日本人第1位になる。管弦楽では、京都フィルハーモニー室内合奏団、大阪交響楽団、オペラハウス管弦楽団、京都市交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団等を客演。さらにOsaka Shion Wind Orchestra（旧大阪市音楽団）、シエナ・ウィンド・オーケストラ等の吹奏楽団との関係も深くその分野でも注目を集めている。ミュージカルでは「レ・ミゼラブル」「マイ・フェアレディ」「ラ・カージュ・オ・フォール」等のロングラン公演を指揮。また、岩崎宏美や、南こうせつ、夏川りみとの共演や、キダ・タローとのコンサートも話題となっている。2014年には、自身の企画により「ベートーヴェン振るマラソン！」と題して、1日でベートーヴェンの全交響曲を1人で指揮。そのギネス級の活動は大きな話題となった。2011年東日本大震災を受け、毎年チャリティコンサートを開催。9回の演奏会で5,400万円を超える義援金を届けた。指揮を湯浅勇治氏をはじめ、松尾葉子、広上淳一、辻井清幸の各氏に師事。現在、オーケストラMFI指揮者。春日井市民第九演奏会音楽監督、関西音楽人のちから『集』代表。

客演コンサートマスター 平光 真弥 Shinya Hiramitsu

愛知県立芸術大学音楽学部卒業。2005年同大学大学院音楽研究科修了。中村桃子賞受賞。ヴァイオリンを青山泰宏、大久保ナオミ、福本泰之、Ewald Danel、岡山芳子の各氏に師事。指揮を紙谷一衛氏に師事。第11回日本クラシック音楽コンクール第3位。第1回宗次ホール弦楽四重奏コンクール第1位。併せて、聴衆賞、オーナー賞も獲得。2007年、2010年及び2012年小淵沢室内楽セミナーにて最優秀カルテットとして「緑の風 音楽賞」受賞。2012年には講師特別賞も同時受賞。これまで、プラハ放送交響楽団等ソリストとして多数のオーケストラと共演。2000年～ウィーン岐阜管弦楽団、2004年～2021年愛知室内オーケストラのコンサートマスターを務めるほか、神戸室内合奏団などの客演コンサートマスターを務める。クラシック音楽を親しみやすくより身近に感じてもらうために、サロンコンサートや学校アウトリーチ等も精力的に行い地域に根ざした音楽活動を展開。愛知県立芸術大学非常勤講師。2022年4月～中部フィルハーモニー交響楽団首席客演コンサートマスター。平成29年度愛知県芸術文化選奨新人賞受賞。

春日井市交響楽団 Kasugai City Philharmonic Orchestra

春日井市交響楽団は1990年に創設され、市民の音楽愛好家を中心に「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」としての活動を続けてきました。愛称「カポ」（KAPO）は英字名称「KASUGAICITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」（capo 頭・先頭に立つ者）の思いもあります。日曜日には市内外から集まった約50名の団員が、西尾町にある「ハーモニー春日井」のホールで練習し、春日井市の音楽文化の原動力となるべく日々研鑽を積んでいます。

プログラム *Program*

ベートーヴェン:「エグモント」序曲 作品84
Ludwig van Beethoven（1770-1827）“Egmont” Overture, Op.84

リスト：交響詩「前奏曲」
Franz Liszt（1811-1886）Les Préludes

《休　憩》 ***Intermission***

シベリウス：交響曲第2番ニ長調 作品43
Jean Sibelius（1865-1957）Symphony No. 2 in D major, Op.43

第1楽章	Allegretto
第2楽章	Tempo andante, ma rubato
第3楽章	Vivacissimo
第4楽章	Finale: Allegro moderato

指　　揮　井　村　誠　貴

演　　奏　春日井市交響楽団

終演後、アンケートにぜひご協力ください。

※QRコードを読み取るとWebでご回答いただけます。

プログラムノート

≪「エグモント」序曲 作品84≫

この曲は、文豪ゲーテによる悲劇の戯曲「エグモント」のために作曲された、全部で10曲からなる劇付随音楽の序曲です。この戯曲は、エグモント伯爵という、16世紀にネーデルラント（現在のオランダ、ベルギー周辺）と呼ばれたスペインの属領にいた実在の貴族の物語です。彼はスペインの支配に対して立ち向かい、最終的には斬首されてしまいますが、そのためベルギーでは英雄とされています。戯曲では、本国スペインから派遣されたアルバ公爵により伯爵が逮捕され、処刑に至るまでが語られています。劇中、伯爵の愛人クレールヒェンが彼の逮捕を知り自殺するというくだりが加わり、一層ドラマチックになっています。また、同じく抵抗運動をしていたオレンジ公ウィリアムも登場しますが、彼は後にオランダを独立させることに成功しました。ベートーヴェンがこの曲を作曲したのは1810年ですが、フランス革命に始まる貴族から庶民への政権交代という人類史上の一大転換期であり、大変混乱した時代でした。この時期、彼が住んでいたウィーンは、ナポレオン率いるフランスにより占領されており、戯曲のネーデルラントと同様な境遇であることが、作曲に少なからず影響していたのではないかと思われます。

さて、序曲はヘ短調で書かれています。冒頭、伯爵の死の予見、あるいはスペインの圧政を思わせる重々しい雰囲気で始まります。その後、急にAllegroとなり激しくなっていきますが、民衆の語り、オレンジ公ウィリアムとの会話など、逮捕に至るまでの戯曲のストーリーを元にしているとされています。曲は急に停止し、木管によるクレールヒェンの祈りを想わせる静かなメロディの後にヘ長調に変わり、「勝利の交響曲」が奏でられ終了します。戯曲では、伯爵が処刑場に赴くところで幕が下ろされ、これを演奏するようになっています。スペイン圧政からの独立を確信しての勝利の曲なのでしょう。想像を膨らませながら聴いていただければと思います。

ベートーヴェンは、この前後で運命交響曲、田園交響曲、「エリーゼのために」などを作曲しています。これらの曲たちとの共通点などを思いながら聴くのもよいのではないでしょうか。

（Vc 門井仁）

≪交響詩「前奏曲」≫

昨年のプログラムにもありました連想交響詩「我が祖国」の作曲家スメタナに影響を与えたと言われているフランツ・リストの交響詩から「前奏曲」を演奏します。

詩、絵画や文学などの形態の標題を音楽で表現した交響詩のジャンルは、リストにより完成されたと言われています。そのリストが作った13曲の交響詩の中で最も有名なのが今回演奏する「レ・プレリュード（前奏曲）」です。

レ・プレリュード（前奏曲）は、もともとはフランスの詩人オートランの詩による男声合唱曲「四大元素」の序曲として作曲されました。その合唱曲の初演の後に、ラマルティーヌの『我々の人生は死により開かれる未来の国への前奏曲にほかならない』という新瞑想詩集の詩を元にした交響詩で改訂された曲です。

このレ・プレリュードの曲の構成としては、第１部：人生の始まり・愛、第２部：人生の嵐、第３部：愛の安らぎ・牧歌、第４部：闘いと勝利、の四つの部分で成り立っています。

まず第１部の人生の始まりでは、弦楽器と木管楽器が交互に奏でる疑問形のような音楽から始まります。そして音楽はAndante Maestosoとなり、トロンボーンなどの低音パートが主題を奏でます。その後に、2ndバイオリンとホルンなどによる愛のテーマへと展開されていきます。

第２部は『荒々しい一吹きが愛らしい幻影を吹き飛ばし、激しい電光が祭壇を焼き尽くす嵐の猛威』とあるように、テンポはAllegroに上がり、チェロによる嵐を予感させる音楽が演奏された後、トロンボーンによる嵐の一吹きへと繋がっていきます。さらにブラスセクションによるファンファーレが鳴り響き、嵐のシーンは最高潮を迎えていきます。

音楽が落ち着きを取り戻した第３部は、オーボエによる愛のテーマで始まり、弦楽器とハープによる愛の音楽へと続いていきます。

その後、音楽は８分の６拍子となり、ホルンによる牧歌的メロディが奏でられます。その牧歌的なメロディはオーボエ、クラリネットなどへと順次受け継がれ、『第２部の嵐の後の、田園生活の心地よい静けさのなかで』とあるように、牧歌のイメージが曲の中に広がっていきます。

第４部は『平穏の中に長い間身を任せていることに堪えられなくなり、戦いのラッパが鳴り響くと、彼を戦列に就かせる…』とあるように、曲は行進曲風に変わり、金管楽器のファンファーレが鳴り響きます。そして、第１部のテーマが再現され、曲はクライマックスを迎えフィナーレに至ります。

そのフィナーレの後の静寂こそが、未来の国へのスタートなのでしょうか？

（Fg 小川俊彦）

プログラムノート

≪交響曲第2番ニ長調 作品43≫

フィンランドを代表する作曲家として知られるシベリウス（1865-1957）は、ロシアやドイツなどの作曲家から大きな影響を受けながらも、フィンランドの伝統や自然を大切に思い作品の創作に力を注いだ人物だ。1865年ロシア帝国の自治領であったフィンランド大公国のハメーンリンナに生まれる。父は医師であったが、シベリウスが２歳の時に他界してしまう。父に先立たれたシベリウスの父親代わりだった叔父が音楽上の助言者だったとされている。叔父はシベリウスが10歳の時にヴァイオリンを与え、後に作曲への興味を持ち続けるよう激励した人物だった。シベリウスは幼い頃からピアノやヴァイオリンを学び、作曲も独学で身につけている。ヘルシンキ音楽院に入学し、さらにその後、ベルリンとウィーンに留学して、音楽家としての技術を学んだ。

1892年にアイノ・ヤルネフェルトと結婚し、新婚旅行はカレワラ発祥の地であるカレリアで過ごした。翌年にはヤルヴェンパーのトゥースラ湖畔に２人の住まいである“アイノラ”が完成し、６人の娘を授かった。

シベリウスは、愛国心が強い事で有名な作曲家とされている。彼は自分自身の事が嫌いで、自分に対して批判的だったといわれている。そのため大袈裟な表現や芝居がかった部分がなく、彼の音楽には全く嘘がない。

シベリウスといえば一般的には「フィンランディア」が有名だが、ベートーヴェン以後最大の交響曲作家と言われるほど素晴らしい交響曲を作曲している。７つの交響曲の中で、特に人気な曲は交響曲第２番と言えるだろう。交響曲第２番は「祖国に対する勝利の思いのこもった曲」だと言われているが、シベリウス自身は否定している。交響曲第２番は、一家でイタリアへの旅行中に描かれた作品だ。２歳になる娘を失って悲しんでいたシベリウスに知り合いの富豪（アクセル・カルペラン男爵）が金銭を援助し、イタリアへの旅行を提案した。シベリウスは提案を受け入れ、妻子を連れてイタリアのラパッロを訪れた。ところがシベリウスは娘の死について、自分の事を責めていた。そのせいかシベリウスは妻子を置いて突然一人で長期間ローマへ行ってしまう。妻子を置いたまま交響曲第２番は完成したと言われている。愛好家の中では、シベリウスが落ち込んでいる自分を奮い立たせるために交響曲第２番を作曲したとされている。シベリウスの思いが民衆のロシアから独立したい思いに響いたのかもしれない。

第１楽章　Allegretto　イ長調

さざめくような音形が弦楽合奏で演奏されて曲は始まる。この音形はこの楽章全体の雰囲気を作る重要なモチーフとなる。そこにオーボエとクラリネットが第１主題を重ね、提示部が開始される。フルートも主題に加わり、ヴァイオリンが副旋律を奏でる。弦楽器の序奏主題に木管楽器が応答する形となる。その後、弦楽器が序奏主題を繰り返しながら勢いを弱めていき曲は展開部へ移行していく。前半は木管楽器の応答主題を中心に展開され、後半ではコントラバスが新しいモチーフを提示する。各楽器で展開しながら勢いを増し、第２主題を示したのち金管楽器が第１主題の副旋律を力強く奏でると曲は一時停止する。弦楽器が序奏主題を繰り返しながら勢いを弱めていきこの楽章を終える。

第２楽章　Tempo andante, ma rubato　ニ短調

この楽章は北欧のもう一つの顔、冬の厳しさを表現している。ティンパニのロールにコントラバス、続いてチェロが重い足取りを表現している。チェロのピッツィカートが同じ音形を繰り返しながら変化していき、ファゴットが寒さに耐えるような第１主題を奏でる。それにホルンが付点のリズムで呼びかける。これは、第１主題の金管楽器のコラールを暗示している。第２主題は弦楽器によって美しく現れる。厳しさの中にも見ることが出来る冬の美しい光景を表しているようだ。終盤は一転して、低音楽器が冬の荒々しい気候を表現している。

第３楽章　Vivacissimo　変ロ長調

この楽章は、荒々しいリズムによるスケルツォである。何かに取りつかれたように進んでいく。総休止の後、トリオに移行する。オーボエによるしみじみとした旋律を管楽器で歌い紡いでいく。再度、慌ただしいスケルツォが戻りトリオが再現される。主題が弦楽器に引き継がれ、４楽章の主題を暗示しながら盛り上がっていく。

第４楽章　Finale:Allegro moderato　ニ長調

感動の頂点でこの楽章が始まる。弦楽器の力強いモチーフにトランペットが勇ましく応える第一主題が始まる。盛り上がりが一段落すると弦楽器の音階的動きが繰り返される。この伴奏に木管が入れ替わりながらもの寂しい第２主題の旋律を奏でる。発展していき最終的には長調に転調することで一気に空気を変え、金管による頂点を作る。この楽章の冒頭のモチーフがフルートによって静かに現れ、第２主題も巻き込みながら高揚し、一層華やかさを増した冒頭が再現される。短調のうねる音階はついには木管にも展開され、これでもかと繰り返される。長調に転調する気配を何度も見せるものの、短調のまま繰り返される。最後の最後についに長調への転調を果たし、金管によってファンファーレのようなモチーフが奏でられる。低弦のピッツィカートに続きファゴットも加わってこの楽章冒頭のテーマが奏でられ、フィナーレに向かっていく。終結部ではオーボエやトランペット、トロンボーンが高らかに第１主題によるコラールを力強く奏で、感動的に全体を締めくくる。

（Cb 大矢光知留）